

与謝野寛『鴉と雨』論

— 大逆事件への嘆きと抵抗 —

はじめに

与謝野寛は、大正四年八月に『鴉と雨』（東京新詩社）を自費出版する。その末文には、「此集に収めたものは、すべて自分が一九一一年に歐洲へ赴いた以前の作である。」と記されている。寛の言葉によれば、この集は、明治四四年一月にヨーロッパへ旅立つまでに作られた詩歌を収めたものである。そしてこの集は、深い陰鬱さに染められている。その原因は、以下のように指摘されている。

近藤芳美氏は、次のように述べている。

私は、この歌集の作品が「紫」以来たどつて来た彼の文学の最高の高さにあるものではないかと考えている。「倦めるたましい」とうたう孤独の心が、氣負いを失うと共に、「相聞」にはなかつた、静かな、内省的な表現をとつて歌われているためである。時代から置き去られ、若い追従者から離れ去られた後に、鉄幹ははじめて彼の「象徴詩」としての短歌を完成させたのであろう。

また、新聞進一氏は、「明星」の廃刊は、文壇の一方を指導した

塚本章子

ジャーナリストとしての寛の生命の終焉」であるとし、「寛の鬱情を表現した短歌作品は『櫛之葉』（明治四三）・『鴉と雨』（大正四）などに見られる。」と述べている。

逸見久美氏は、『相聞』（明四三・三、明治書院）、『櫛之葉』（明四三・七、博文館）について、「明星」廃刊の鬱々とした日々詠まれた自虐的、自嘲的な作品が多い。」と述べている。そして、『鴉と雨』についても、「寛は渡欧に向けて語学に励み、大きな期待と共に妻に資金調達を負わせている屈折した思いも抱き、さまざまに心は動揺した。そうした「明星」廃刊後から渡欧直前までの、心の機微を詠んだのが『鴉と雨』であった。」と位置付けている。また、「世間から見離された悲哀からくるヒロイックな悲劇性」、山川登美子への思慕と、その死への悲嘆、執筆に忙しい妻晶子の傍で「無聊をかこつている夫の倦怠」などを指摘している。

このように、寛の鬱屈の原因としてあげられてきたのは、主として、新詩社同人たちの脱退による、明治四一年の『明星』廃刊の失意である。また、寛が歌人として行き詰まる一方で、ますます活躍する晶子への嫉妬と不仲、登美子との恋の再燃と登美子の病死、などであるといえる。

だが、中村文雄氏は、「不遇な時代、それをより深刻にした背景には、大逆事件があったことを見逃すわけにはいかない。」と述べ、事件の衝撃を指摘している。

大逆事件は明治四三年に起こり、翌四四年一月に判決が出され、二名が処刑される。私は以前、拙論⁽⁵⁾で、大正四年三月におこなわれた衆議院選挙に寛が立候補した動機のひとつに、この事件への抵抗があり、寛にとつて事件が生涯忘れられぬ深い傷跡となっていることを述べた。そして、『雨と鴉』に収録された「誠之助の死」に触れ、さらに「雨」についても、閉塞していく日本のなかで自由を失っていく苦しみや焦燥を訴えている詩であると論じた。⁽⁶⁾

大逆事件が背景にあるとすれば、「やや卑屈さが鼻につく」ともいわれるような、この『雨と鴉』の鬱屈も、無理からぬものと思われる。

『雨と鴉』の陰鬱さには、先に挙げた、『明星』廃刊や、妻への嫉妬といった鬱屈だけではなく、大逆事件が大きな影を落としているのではないか。『雨と鴉』を再考し、「誠之助の死」、「雨」以外の詩歌にも、事件による鬱屈が広く見られることを論じたい。

『雨と鴉』は、事件に対する嘆きと抵抗の書として位置付け直すことができるのではないだろうか。

一

寛は、『雨と鴉』の末文で、「当時の自分は幻滅と、苦笑と、倦怠と、および焦燥との中に醜く懊悩して居た。(略) 巴里に行つて自分は新生の喜びを知つた。」と述べている。また、『巴里より』(大三・五、

金尾文淵堂)の「巴里より」の初めに」では、「予の歐洲に赴いた目的は、日本の空気から遊離して、気楽に、且つ真面目に、暫らくでも文明人の生活に親むことの外に何もなかつた。」と述べている。

寛のヨーロッパ行きが計画されていた時とは、大逆事件の処刑がおこなわれた頃であつた。石川啄木の「明治四十四年当用日記」、一月二五日には、次のように記されている。

社でお歌所を根本的に攻撃する事について渋川氏から話があつた。夜その事について与謝野氏を訪ねたが、旅行で不在、(略) 与謝野氏は年内に仏蘭西へ行くことを企てゝゐるといふ。かへりに平出君へよつて幸徳、菅野、大石等の獄中の手紙を借りた。

明治四四年一月一八日に事件の判決が出され、同月二四日に二名、二五日に一名が処刑される。右の日記は二五日のものである。寛のヨーロッパ行きは、まさに事件の震撼のただなかで計画されているのである。先ほど挙げた、「日本の空気から遊離して」、「文明人の生活に親しむ」という寛の言葉は、国家の思想弾圧、処刑という衝撃から、矢も楯もたまたま逃げ出したいという思いを表しているのである。

以前、拙論⁽⁸⁾でも述べたように、寛は事件に大きな関わりを持っている。寛は、新宮の牧師で奇跡的に事件の連座をまぬがれた沖野岩三郎と生涯に渡つて親しく交友するのであり、大石誠之助とも交流があつた。寛は明治三九年に新宮を訪れ、大石の案内を受け、和貝夕潮、鈴木夕雨らと熊野川の川下りをしている。⁽⁹⁾ 四二年にも寛は再び新宮を訪問している。事件が起きた後、寛は沖野に依頼され、事件の弁護

人として、『明星』の同人でもあった平出修を紹介する。そして、平出を伴って森鷗外のもとを訪れ、無政府主義と社会主義について教えを請うのである。寛は、事件の渦中にいたといえる。

寛は、大逆事件に対する憤慨を書き残している。寛が、佐藤春夫の父豊太郎に宛てた書簡（明四三・一一・一〇付）には、「想ふに官憲の審理は公明なる如くにして公明ならず、この聖代に於て不祥の罪名を誣ひて大石君の如き新思想家をも重罪に処せんとするは、野蠻至極と存じ候⁽¹⁰⁾。」と書かれている。

また、和貝彦太郎（夕潮）の、渡辺順三宛書簡（昭三四・七・四付）には、「私は平出氏の依頼を受け、（塚本注・大審院裁判資料原本から）さきに赤印を入れた部分を別に複写して三通を作り、両先生（塚本注・寛と鷗外）に通ずつを差上げ、残る一通は平出氏の許に止めました。」と書かれている⁽¹¹⁾。寛も裁判資料を見ていたのである。

そして、平出や啄木が与謝野家に入出入りするなかで、寛は裁判の詳細を正確にリアルタイムで知り得ていたであろう。啄木「明治四十四年当用日記」、一月三日にも、「平出君と与謝野君のところへ年始に廻つて、それから社に行つた。平出君の処で無政府主義者の特別裁判に關する内容を聞いた。」と書かれている。先に挙げた二五日の日記とあわせて見ておきたい。啄木は頻繁に与謝野家と平出家に入出入りしており、事件に関する情報は彼等の間で共有されていたのである。

「欧洲へ赴いた以前の作」を収録したとされる『鴉と雨』には、大逆事件の影が色濃く落ちていると考えられるのである。

二

『鴉と雨』について、初出から書き改められた箇所や、収録されなかつた歌から、大逆事件が意識されているところを捉えてみたい。

まず、「誠之助の死」について見る。この詩は、初出（『三田文学』明四四・四）では、「春日雑詠」と題された詩の一部分であつた。『鴉と雨』に収録されるにあたり、前半部分が「春の鳥」、後半部分が「誠之助の死」と題され、分割されたのである。この変更によつて、大石誠之助を悼むという主題が、タイトルにも明示されたのである。

だが一方で、最終節「誠之助と誠之助の一味が死んだので、／忠良な日本人は之から氣楽に寝られます。／おめでたう。」の、「忠良な日本人は」の行の後にあつた、「例へば、Tolsstojが歿んだので、／世界に危険の断えたよに。」という二行は、削除されている。それは、皮肉の緩和であり、ひとつの後退と捉えることができるのである⁽¹²⁾。

他にも、『鴉と雨』に収録されるに際して、初出から書き改められたものは多くある。また、初出の歌群から『鴉と雨』に収録されなかつた歌もある。注目されるものをいくつか挙げる。

まず、137「葛もて組みし筏の流れ去り濁れる沖に白くただよふ」を見る。この歌は初出（「くさぐさの歌」『早稲田文学』明四三・七）では、「葛もて組みし筏の流れ去り熊野の沖に白くただよふ」であつた。（傍線塚本、以下同様。）

「組める筏の」が「組みし筏の」に、「熊野の沖に」が「濁れる沖に」に改められている。初出では「熊野の沖」が詠まれており、寛のなかで、かつて旅した熊野川と海の情景が想起されているのである。

『相聞』には、「茅野蕭々、北原白秋、吉井勇氏と、伊勢より紀伊

の熊野に遊びて詠める歌。明治三十九年十月。」という歌群が収められている。先にも述べたように、この旅で寛は大石に新宮を案内され、熊野川の川下りをしている。この歌群に、

307 暗き夜も高瀬七つを掉して来ぬ君にと細き丸木の筏

(熊野川を下る。)

310 明るくも材木船のならびたる熊野の秋の川口の色

という歌がある。これらの、「熊野川」に浮かぶ「筏」、「材木船」という情景が『鴉と雨』137の初出の歌につながっている。そして、「流れ去り」、「沖に」、「ただよう」という虚無的なものへと変わっている。

この歌の「熊野の沖」という言葉が、『鴉と雨』に収録される際に「濁れる沖に」と書き換えられている。「熊野」の地名が伏されたのである。それは事件の起きた場所を伏せたということであり、同時に、寛が熊野を旅して大石の案内を受け、川下りをしたことを伏せたということでもある。ここには、寛の事件への恐れを見ることが出来る。

次に注目したいのは、『鴉と雨』14の「病むときに飯場の子等が嘗むと云ふだいなまいとか我が吸ひし人」という歌である。この歌の初出、「自からを嗤ふ歌」(『早稲田文学』明四三・一〇)には、全三〇首中他に二首「だいなまいと」を詠んだ歌が含まれている。次の歌である。

嗅ぎなれしだいなまいとの煙こそ女の如くうら恋しけれ
逃げながらだいなまいとの爆音を数ふる如く女より逃ぐ

「嗅ぎなれしだいなまいとの煙」、「だいなまいとの爆音を数ふる如く」とあるように、14の歌よりも、きな臭い印象を受ける歌である。これら二首は、『鴉と雨』に収録されていない。⁽¹³⁾

「だいなまいと」を詠んだ歌が三首入ることで、この言葉が印象付けられ、大逆事件が想起されることを寛が忌避したと考えられるのである。

以上述べてきたことについて、少し整理しておきたい。「誠之助の死」というタイトルが打ち出され、事件が強く印象づけられる一方で、その言葉の一部が削除されて内容面では後退している。また、他の歌では、「熊野の沖」という言葉が消され、「だいなまいと」を詠んだ二首が未収録となっている。

「誠之助の死」とあれば、大石誠之助の出身地が熊野新宮であり、幸徳秋水と一緒に熊野川の川下りをしたことが大石への疑惑を招いたことが思い起こされる。そしてまた、宮下太吉が天皇暗殺を企てて爆裂弾を製造したことが事件の発端となったこと、内山愚童や、新宮の成石平四郎がダイナマイト所持で検挙されたことなどが想起される。

「熊野の沖」という言葉が伏せられ、「だいなまいと」二首が収録されなかったのは、読み手または政府当局の、事件へのまなざしが『鴉と雨』全編に広がることを忌避し、初出から表現をやらわらせた「誠之助の死」一編に限定したいという意識が働いたということではないか。それは逆に言えば、『鴉と雨』全編に、広く事件への思いが読み取られていく可能性があるということでもある。

ここでは、『鴉と雨』に収録された詩歌のなかで、「誠之助の死」、「雨」の他に、大逆事件との関係が読み取れるものを探ることとする。

95～130（及び318、322）の歌は、事件の処刑直後、明治四四年二月一日発行の『三田文学』第二巻二号に「落木集」として発表されたものである。『鴉と雨』のなかでも特に、例えば次の二首からも伺えるように、陰鬱さを強く感じさせる歌群である。

- 127 つぶつぶと泡立つ水を底に聞く魚のたぐひか倦めるたましひ
128 わが為にわかきうぐひす花に来てわが失ひしたましひを喚ぶ

これらの鬱屈は深く病んだものを感じさせ、ひとつの突き詰められた精神の表現として注目される。冒頭で述べたように、近藤芳美氏が、『鴉と雨』を「彼の文学の最高の高さにあるもの」と評して例に挙げたのが、127の歌であったことを想起しておきたい。

「落木集」が発表された『三田文学』の、この時期の誌面には、永井荷風や鷗外といった人々の文章に、大逆事件に対する批判が多く見られる。このことは次章で述べるが、「落木集」も事件後の衝撃的な雰囲気の中で掲載されていることを考慮する必要がある。⁽¹⁴⁾以下、「落木集」として発表された歌群に事件の影を探っていくこととする。（テキストは『鴉と雨』に従う。語句・表記の異同がある場合は、初出時のものを句数とともに括弧内に示す。先述の127128に異同はない。歌の配列は変更があるが適宜注記する。「落木集」全三九首中一首のみ未

収録。）

まず、目を引かれるのは「赤」という色が頻出していることである。次のように、一〇首も「赤」（「紅」・「朱」）が詠まれている。

- 102 わが馬の息に触るれば蔦の葉も櫛も散りぬ赤く悲しく
103 青白き荻の葉風にひろき野の入日の朱をば消して降る雪
104 石土手に身をのしかけて物言ひぬ赤き傘さす船の少女と
105 青やかに二月の朝の海明けて赤き切崖雪をいたたく
107 よろづ世に白くさびしき身と知りて刹那を染むる赤き杯
111 わが前に紅き風吹きやつちのそよげば見ゆる白き片肘
112 ちりめんの赤き襦袢の片袖と船とを映し霞みたる水
 （2紅き襦袢の 4船と映して）
114 赤き鳥なに驚くや鳴きさしてわれの夢よりをちかたに逃ぐ
 （1紅き鳥 2なにに驚く）
121 溜りたる水をめぐりて草の芽の青めば枝に紅き梅さく
123 うす赤く青く野火もえ枯草を打ちて光りぬ長き柄の鎌

この「赤」の多出には、処刑された社会主義者達への追悼の思いが込められていると捉えることが出来るだろう。

佐藤春夫によれば、寛は大逆事件の時、啄木の手帳に「塵あがる大太鼓鳴る赤き旗目に満つ斯る幻も好し」という歌を書いたという。また、『櫛之葉』に、「信条」という詩がある。

国のためには無籍者、／人のためには親無児。／何かあらん、何

かあらん。／だいなまいとと、赤き旗、／断頭台と、この外に。

この詩の初出は、明治四二年三月『東京二六新聞』である。明治四一年六月に、赤旗事件が起きている。山口孤剣の出獄歓迎会の後、荒畑寒村らが用意した赤旗を振りまわしたため、大杉栄、堺利彦、山川均、荒畑らが逮捕された事件である。この詩の背景に、赤旗事件以降の社会主義者に対する寛の関心の高さを見ることもできる。

大逆事件の処刑がおこなわれた直後に、さすがに「赤き旗」とは詠めなかつたであろうが、『落木集』に「赤」を頻出させることで、処刑された人々への追悼を表していると考えられるのである。

次に、122「蠟燭を誰が家よりか脚へきて棟にとまりぬさびしき鴉」(4 枯木にとまる)という歌を見る。

「蠟燭」という言葉、そしてその白色と「鴉」の黒色という組み合わせが、仏事や死を連想させる。「鴉」は、『雨と鴉』というタイトルにもつながっている。「鴉」と「雨」、それは熊野という地を指し示している。「鴉」は、熊野三山の信仰の鳥「八咫鳥」を連想させるし、「雨」もまた、多雨地帯として知られる熊野の特徴である。⁽¹⁶⁾

前章でも挙げた『相聞』の明治三九年紀伊熊野の旅の歌に、次のような歌がある。

323 橘の蔭に朝睡す八咫がらす熊野の鳥さはな呼びそね

(新宮にて、清水氏の家に宿る。)

「八咫がらす」が詠まれ、添書に「清水氏の家」とある。122の「誰

が家より」、「鴉」という言葉は、この『相聞』323とつながっている。122の歌は、新宮の人々の死を悼んで詠まれているのである。

『相聞』の紀伊熊野の旅の歌群には、他にも「落木集」とのつながりを感じさせるものがある。次の歌を見る。

99 枯れし木に片手を掛けて冬は見ぬ骨もて積める白き切崖

(1 粘れし木に 3 「冬」は見ぬ)

105 青やかに二月の朝の海明けて赤き切崖雪をいたたく

(4 赤ききりぎし)

106 いなづまに髪青き鬼乗りて馳せ無辺に投ぐる白き髑髏

(「落木集」では、99は6首目、105は24首目、106は25首目。)

99の「骨もて積める白き切崖」や、106の「無辺に投ぐる白き髑髏」は、多く者の死を連想させる言葉である。99に「切崖」、105に「海」、「切崖」という言葉がある。106には「いなづま」、「鬼」、「髑髏」という言葉が見られることに注目したい。106の歌は激しい感情を歌って印象的であるが、抽象的で今ひとつ分かりにくい。だが、『相聞』の紀伊熊野の旅の歌群に注目すれば、この歌には、熊野の名所鬼ヶ城を詠んだ次の歌がふまえられていると思われる。

295 浪猛にうめきぬ八つに裂けて死ぬ矛を立てたり傘妻の岩群

(以下数首、木本の鬼が城にて。)

297 岩さへも蚯蚓ばれして血ばしりぬ鬼の子遊ぶ紀の海の洞

298 浪怒り牙噛みぬ石は骨たちぬ一步す早も鬼にとられむ

299 牟婁の磯誰が手ぢからに岩たふし下にかおきし八つの雷

鬼ヶ城という、太平洋に面し、波に激しく切り裂かれた断崖の前に、「鬼の子」、「鬼」、「骨」、「雷」という言葉が見られる。

『鴉と雨』106の歌は、この鬼ヶ城の厳しい風景を回顧しながら、新宮の人々が処刑されたことへの怒りを、「鬼」たちの怒りとして表現しているのである。

大石の死に対する無念さは、大石に新宮を案内されたこの旅の記憶をよみがえらせたのではないか。「落葉集」は、『相聞』の紀伊熊野の旅の歌群を密かにふまえながら詠まれたと考えられるのである。

他に、もう少し「落木集」を見ておきたい。先に、死のイメージを指摘したが、このイメージは他にも見られる。124「かれがれの甲斐の葡萄を手に採れば細き茎より白露の泣く」とあり、生命のはかなさ、死の悲しみを感じさせるのである。

本章のはじめに挙げた、127「倦めるたましひ」、128「わが失ひしたましひを喚ぶ」の二首もまた、大逆事件に衝撃を受けた寛の、深刻な魂の危機を表現しているのである。

四

前章のはじめに少し触れたように、「落木集」が発表された頃の『三田文学』には、編集長で慶應義塾大学教授であった荷風や、荷風を教授に推薦した鷗外が、大逆事件に対する批判を度々綴っている。また、同学教授であった馬場孤蝶も、事件への批判を含んだ文章を書いてい

る。荷風、鷗外、そして孤蝶も事件の衝撃を強く感じていたのである。事件後しばらくして、荷風は江戸の戯作文芸へ、鷗外は歴史小説へと方向転換していくことになるのであるが、『三田文学』で、編集長荷風と御意見番鷗外らは、事件と闘うための論陣を張っていたといえるのである。

ここでは、当時の『三田文学』が事件に対するひとつの抵抗の場となっていたことを検証し、「落木集」が置かれていた状況を捉えたい。

荷風は、創刊号(明四三・五)以降、「紅茶の後」を連載している。ここには、事件への様々な批判が見られるので、少し辿ることとする。明治四三年一〇月(第一巻六号)には、次のように書かれている。

これまで目こぼしになつてゐた社会主義の出版物が、新旧を問はずどしく、検査されつゝある。見馴れ聞き馴れた風俗壊乱が秩序紊乱と云ふ文字に代へられて、基督教の家庭新聞までが此の名目の下に発売を禁止されるなど、世間は何となく不穩である。(略)敢て政治的意味に於ける社会主義一味の党類のみには止るまい。(略)果して、文芸及び凡ての新しい思想に対する其筋の干渉が、其れ位までに激しく進んで行つたとしたならば、吾々は如何にするであらう。日本の芸術の前途は如何になり行くであらう。

荷風は、社会主義思想に対する規制が発禁処分の増加を引き起こし、信仰の自由への抑圧に及んでいることを憂慮している。そしてこの動きが、「文芸」や「新しい思想」に対する国家権力の「干渉」へと進んでいくことを危惧しているのである。

また、演劇について、

自分の理想の妨害たるべき障壁は（略）登場脚本の検閲を掌る警視庁である。否。警視庁をして此の如く余儀なくせしめた日本の法令である。自分は劇場に関する法令が改正されない限り、（略）吾々の理想とする真の社会劇は到底今日の劇場の舞台に演ぜられる事は出来まいと思ふ。

と述べ、警視庁及び国家の取締を批判しているのである。⁽¹⁷⁾

この論調は、明治四三年一月（一卷八号）の「紅茶の後」につながる。このなかで荷風は、近年の演劇のつまらなき、思想性の欠如について次のように書いている。

○○
 険だと云ふ。面白いぢやありませんか。日本は一等国になつたから。○○
 ○○○○学問と芸術だけは或る程度に止めて置くがいと云ふ。
 面白いぢやありませんか。

伏せ字の多さは、発禁処分を恐れていることであろう。「危険」という言葉によって学問や芸術が抑圧されていくことへの抵抗が、皮肉な言葉で綴られているのである。

さらに荷風は、大逆事件の処刑がおこなわれた後、明治四四年二月、寛の「落木集」と同号（二巻二号）に掲載された「紅茶の後」のなか

で、「社会一般の大勢を見るがごとく。現代の日本に於て何一ツ文学に幸ひするものがあらう。文部省は学生に演劇類似の遊戯をなす事、小説を読む事を禁止してゐる。内務省は新しき世界思想の輸入を防止してゐる。」と述べている。ここには、日本で文学を続けていくことに困難を感じ、鬱屈する荷風の姿を見ることが出来る。

そして荷風は、「文学が国家及社会に有害なりとの謬見に捉はれたる日本に生れ、日本の文学者として此れを職業にしやうと云ふ。自分は先づあまりに其の暴なるに驚かざるを得ぬ。」と書く。荷風は日本で文学者として生きていく困難を嘆き、そして、「社会的生活の裏面に於て」、文学が生き延びる可能性を見出そうと述べてるのである。

荷風は『三田文学』に、大逆事件を批判する論陣を張っているのである。

鷗外もまた、『三田文学』に発表した小説のなかで、発禁問題や、大逆事件に対する批判を表現している。明治四三年九月（第一巻五号）の「フラスチエス（対話）」では、N判事が記者に対して発禁の基準を説明する。その記事を読んだ文士が判事を呼び止め、問答を仕掛けるが、文士は判事をしっかりと論破せずに引き下がろうとする。その時「デモン」が現れ、文士を「やい。へろく文士。」と罵り、判事の言い分に「逃げ腰になつて」、「引き下がる」意気地なさを批判する。また判事に対して、「威力は正義の行はれるために与へてあるのだぞ。ちと学問や芸術を尊敬しろ。」と言い捨てて去るのである。

ここには、発禁処分の基準が主観的で曖昧であることや、国際感覚が欠落していることなど、様々な問題が暴き出され、批判されている。

同年十一月（第一巻七号）には、「沈黙の塔」が掲載される。

芸術も学問も、パアシイ族の因襲の目からは、危険に見える筈である。なぜといふに、どこの国、いつの世でも、新しい道を歩いて行く人の背後には、必ず反動者の群がゐて隙を窺つてゐる。そして或る機会に起つて迫害を加へる。

ここには、大逆事件に対する批判が示されているのである。翌一二月には、「食堂」が発表される。

『とう／＼恐ろしい連中の事が発表になつちまつたね。』

木村に言つたわけでもないらしいが、犬塚の顔が差し当り木村の方に向いてゐるので、木村は箸を輟めて、『無政府主義者ですか』と云つた。

そして木村は、犬塚たちの、無政府主義、虚無主義とは何かという疑問に涉々答える。さらに話は文学や言論の自由へと展開する。『さうすると文学の本に発売禁止を食はせるのは影を捉へるやうなもので、駄目なのだらうかね。』という犬塚の言葉に、木村は「只僕は言論の自由を大事な事だと思つてゐますから、発売禁止の余り手廣く行はれるのを歎かほしく思ふ丈です。」と答える。ここには、思想・言論の自由は守られねばならないという態度が示されているのである。鷗外もまた、この時期『三田文学』誌上で、発禁処分や大逆事件という思想や表現の自由を規制する動きに対して抵抗し続けている。

しかし、鷗外はこの後、微妙に方向転換をしていく。明治四四年三

月(第二卷三号)「妄想」では、「世界に恃むに足るものは自我の外には無い。それを先きから先きへと考へると、無政府主義に帰着しなくては已まない。自分はぞつとした。」と書かれている。この「自分はぞつとした。」という言葉には、自らは無政府主義者とは一線を画するということ、鷗外の自己防衛を見ることができよう。

孤蝶にも、事件への批判を含んだ文章があるので挙げておく。明治四四年一月(第二卷一号)に、「こし方」が掲載される。ここには、

『男は一生のうちに一度は牢屋に入っている位の勢がなければいかん』

これは、田原に対する兄の遺言になつて了つた。進まんと欲する人の路は、何等かの方面に対する revolt の路である。何等かの方面からの迫害を期さなければならぬ路である。田原の兄のその一語は、田原のやうな純芸術の路を行くものにも、何等かの教訓を与へるものでは無からうか。

という文章がある。事件のただなかで発表されたこの小説には、秋水と同様に、爆発物取締規則違反容疑で投獄され、フィラデルフィアで客死した兄辰猪の生き方や言葉が、孤蝶に大きな指針を与えるものとして描かれているのである。そして孤蝶もまた、大逆事件への抵抗を(18)続けていく。これらのことについては、以前拙論で述べたことがある。

他にも見ておきたい。明治四三年十一月(第一卷七号)には、太田望音「紙屑籠」が掲載されている。「社会主義とやら云ふものも其筋では差し止めると云ふ事で何んでもそんな主義を持つて居る奴は、飯の食へないやうにしてやるのだとか聞いた。主義を持つてば箸が持てず

では囁困る事であらう。このような文章も見られるのである。

社会主義者に対する思想弾圧は、発禁処分、脚本の取締りという、表現の自由を規制する動きと一体となって、文学者を苦しめる問題となっていた。『三田文学』は、大逆事件に抵抗するひとつの論陣を張っていたのであり、その論調は明治四三年後半頃から見られ、「落木集」が発表された頃には、事件の展開とともに高まっていたといえる。⁽¹⁹⁾

なお、寛の、「誠之助の死」を含む「春日雑詠」の初出もまた、『三田文学』であったことを付け加えておきたい。

このような状況から見ても、『三田文学』に発表された「落木集」には、事件への暗澹たる嘆きが詠まれていると考えられるのである。

五

『鴉と雨』には、これまでに述べてきたもの他にも、大逆事件によってもたらされた喪失感やいらだちが、広く見られるのではないかとはいくつか、挙げていきたい。

大逆事件は、国家が個人の思想、表現の自由を剥奪した事件であり、旧制度を打ち破り、精神の解放を歌おうとする「明星」の理念は、根底から否定されることになっただろう。162「わが時は失はれたり涙もて築きしものぞすべて流るる」(「折々の歌」『早稲田文学』明四四・一〇)。例えばこの歌に、「明星」以来寛が掲げてきた精神の自由が、剥奪されてしまった喪失感を読み取ることもできるだろう。

さらに見る。82「神経の棘の木立を踏みじり悪の力は自動車を駆る」。「自動車」は、当時は限られた特権階級の乗り物である。この歌

にも、為政者への批判やいらだちが感じられる。また、92「県庁の窓の横を白く刺し短剣のごと光る夏かな」には、県庁のドームを短剣で刺すという、激しい制度批判が込められているのである。

そして、81「不思議なる塔の斜塔かわが心しづかなる日に黒く傾く」は、鷗外の「沈黙の塔」を連想させる。

次に、詩に目を向けてみる。「妄動五篇」⁽²⁰⁾から、二篇目の詩を見る。

「わが行手こそ闇なれ、真冬なれ、／あまたの児を伴れたる乞食の孤独なれ。／苦痛へ、苦痛へ、氷の路へ……／死の嵐は無残の爪を垂れて掴みかかる」。寛は自身の孤独を「乞食の孤独」と表現する。これ以上ない程のどん底に突き落とされた「苦痛」や惨めさが、彼にあったのである。「死の嵐は無残の爪を垂れて掴みかかる」、これは暴力をふるう国家をイメージさせる。そしてこの「嵐」に対して、「ただ恃むは、わが心猶光れり、／水底の黄金の如く。／また恃むは、われに抗ふ力残れり、／傷負ひし獣も猶その角を前に向くる如く。」と、「抗ふ力残れり」と書くのである。

そして、「われは、かよわく蒼白き全身を露出し、／前に倒れし人の血にのめりつつ進まん。／苦痛へ、苦痛へ、氷の路へ……／われはかの「虚無」に溶け得ざれば。」と続ける。「前に倒れし人の血にのめりつつ進まん」という文は、事件で処刑された人々のことを想起させ、うちひしがれつつも、前進しようと必死にもがく姿を見ることができるのである。

この「妄動五篇」は、『鴉と雨』の最後に置かれている。二篇目におかれたこの詩の、もたえるような苦しみと、そこから必死に立ち上がるとうとする痛々しくも果敢な姿は、『明星』廃刊や晶子との不仲と

いう理由からだけでは説明のつくものではない。大逆事件に傷付き、思想・言論の自由をめぐる国家権力と激しく苦闘していればこそなのである。

そして、寛は满身創痕のなかで、かすかな希望を求めてフランスへと旅立っていくのである。

おわりに

『鴉と雨』には、「誠之助の死」、「雨」以外の詩歌にも、大逆事件に対する鬱屈した思いが表現されているのである。

初出から書き改められた箇所や、収録されなかった歌などから、寛の事件に対する恐れも伝わってくる。

また、「落木集」が発表された『三田文学』では、編集長永井荷風をはじめ、森鷗外や馬場孤蝶らが、事件に対する抵抗を示しており、ひとつの論陣を張っていたといえる。寛もまたその中で、自らの抵抗の思いを歌に詠んでいるのである。そして、この「落木集」やその他の歌の背後に、大石誠之助に案内された、明治三十九年一〇月の紀伊熊野への旅を詠んだ歌群が浮かび上がってくるのである。

「鴉」、「雨」という熊野新宮を暗示する言葉が、この詩歌集のタイトルに選ばれているということは、この集全体が、大逆事件の衝撃を強く受けた集として、そしてまた、大石誠之助ら新宮の犠牲者たちへの追悼の集として読まれることを要請しているともいえるのである。

『鴉と雨』が自費出版されたのは、発禁処分になって出版社に損害を与えることを、寛が最初から危惧していたからとも考えられる。

『鴉と雨』は、大逆事件への嘆きと抵抗の書として、位置付けることができるのである。

注

(1) 「与謝野鉄幹(続)」『短歌』第六卷三号、一九五九・三)

(2) 「与謝野寛の挫折」『短歌研究』第二七卷一一号、一九七〇・

一一)

(3) 『鴉と雨全釈』「解説」(二〇〇〇・一一、短歌新聞社)。大逆事件にも触れられているが「誠之助の死」についての指摘に留まる。

(4) 「大逆事件をめぐる与謝野鉄幹・晶子の立場」『春秋』第二一

三(二一五号、一九八〇・五、六)

(5) 「晶子と寛、大逆事件の深き傷跡」〈新資料〉沖野岩三郎宛、

晶子紀州旅行の礼状」『日本近代文学』第七七集、二〇〇七・

一一)

(6) 永岡健右『与謝野鉄幹研究—明治の覇気のゆくえ—』(二〇〇六・一、おうふう)に「雨」と大逆事件の関連が指摘されている。

(7) 青井史『与謝野鉄幹 鬼に喰われた男』(二〇〇五・一〇、深夜叢書社)

夜叢書社)

(8) 注5に同じ。

(9) 「同人遊記」『明星』第二二号、明三九・一一)に、「医家大石祿亭氏に案内せられ和貝夕潮、鈴木夕雨二氏と共に熊野川を渡り、対岸御船村の祿亭氏の令甥西村伊作氏の寓居に遊ぶ。」とある。

(10) 逸見久美編『与謝野寛晶子書簡集成』第一卷(二〇〇二・一〇、

八木書店)

- (11) 渡辺順三、塩田庄兵衛編『秘録・大逆事件』上巻（一九五九・九、春秋社）
- (12) 永岡健右氏（注6）も、「初出形態の大胆なアイロニー表現から、（略）大幅に後退させた」と述べている。
- (13) 逸見久美氏（注3）は、14の歌の「評」で、この二首が収録されていなかったを指摘している。
- (14) 田中惣五郎『幸徳秋水』（一九五五・一〇、理論社）に、「明治四十三年十二月十日に公開禁止の秘密裁判が開始され、十二月末に早くも結審した。」とある。寛や荷風らにも即座に情報は伝わっていたと考えられる。
- (15) 佐藤春夫「晶子曼陀羅」『定本佐藤春夫全集』第一三巻（二〇〇〇・一、臨川書店）
- (16) 辻本雄一氏は、「与謝野鉄幹・晶子と新宮」（『与謝野晶子倶楽部』第七号、二〇〇一・三）で、「寛は熊野を巡って色々な歌を詠む中で「鴉と雨」を熊野の典型的なもの」として、「詩文集のタイトルにしたのではないか、だから「鴉と雨」というのは、熊野を代表する非常に象徴的な意味を持っていた」と述べている。
- (17) 明治一五年、劇場取締規則が發布される。二三年に制定し直され、「二週間前に演劇脚本を警視庁に差出検査を受くべし。」とされる。三三年一月に改正發布、「演劇興行中は許可を受けたる脚本を備置くべし」という厳しいものになる。これらのことは、拙論「日清戦争後の緑雨―国家主義化への抵抗―」（『近代文学試験』第四二号、二〇〇四・一二）でも論じている。
- (18) 「馬場孤蝶と与謝野寛、大正四年衆議院選挙立候補―大逆事件

- への文壇の抵抗―」（『近代文学試験』第四八号、二〇一〇・一二）
- (19) 明治四四年二月四日におこなわれた三田文学会の講演会で、平出修も講演し、「社会主義と無政府主義に就いて自己の感想を披瀝」したことが、「三田文学講演会」（『慶應義塾學報』明四四・二）に記されている。
- (20) 寛によって「一九一一年作」と書かれている。
- 〔付記〕与謝野寛の『鴉と雨』、『相聞』、『櫛之葉』、『巴里より』（晶子共著）のテキストは、『鉄幹晶子全集』（二〇〇一・一二、勉誠出版）を使用し、ルビは原則として省略した。

（つかもと あきこ、甲南大学教授）